

---

# 月面展覧会

あずまや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月面展覧会

### 【著者名】

あずまや

### 【あらすじ】

当代最高とうたわれた老画家マルコは、身に余るほどの中と名声を手にした一方、壊れゆく季節一つさえ取り戻せなかつたことにひどく心を痛めていた。そんなある日、宇宙船の打ち上げ中継を見ていて閃いたマルコは、生涯最高傑作をさつと描き上げるとそれを友人の宇宙飛行士に手渡し、耳を疑うような展覧会の話を持ちだした。

マルコはダ・ヴィンチやピカソの再来とうたわれた、当代最高の  
よび声高い画家だった。芸術家としては運が良かつたほうであろう。  
生きているうちに作品が認められたのだから。

老画家は筆一つで身に余るほどの富と名声を手にした。

それでも毎日が不満でいっぱいだった。

「暦では秋も終わりだというのに、枯葉一つ落ちてないじゃないか  
！」

ロンドン、パリ、ニューヨーク、東京……薄もやのかかった街を  
ホテルのテラスから見下ろすたび、マルコは額に汗をにじませながら  
そう叫ばずにはいられなかつた。

氷河は溶け、サンゴは枯れ、嵐は街ごとなぎ倒し、砂漠は広がり、  
動物は滅んでいった。そんな大事件も恵まれた国の人々のあいだで  
は、俳優のスキヤンダルや凶悪事件の実況と同様、画面のなかの娛  
楽の一つでしかなかつた。漠然と行く末を悲観する人々も少なから  
ずいたが、ボタン一つでチャンネルが切り替わると、もう笑つてい  
た。

遠い土地の災難はまだしも、万人に身近な季節といつものが壊れ  
てしまつたというのに、その変わり方があまりにも緩慢だつたせいで、人々は今現在の気候が『普通』なのだと思いこんでいた。過去  
の記録を持ちだして騒いでいるのは数字好きの学者くらいのものだ。  
マルコは無力だった。春の花、夏の鳥、秋の風、冬の月、なに一  
つ取り戻すことはできなかつた。札束を手にしたからなんだという  
のだ。あんなものは『手遅れ』になつた後では、せいぜい鼻紙か燃  
料にしかならない。絵筆を置こうと思ったことは何度もあった。本  
に耽り、色に溺れ、ボトルを空け、旅から旅へ……どこに足を向け、  
どこへ逃げても、果てにあるものは同じだつた。果てにあるものは、  
色あせたなじみの扉だつた。

そんなんある田のじと。宇宙船の打ち上げ中継を見ていて、マルコはハツと閃いた。さうそくキャンバスに向かい、生涯もつとも短い時間で、生涯もっとも満足のいく作品を描き上げた。

マルコはその絵を携え、ヨハンといつ男の家を訪ねた。歳のわりに体の引き締まつた家主はマルコを快く迎え入れた。トロフィーやメダル、惑星儀や月球儀、そしてマルコのオリジナルやレプリカでいっぱいの書斎。老画家はそんなものには田もくれず、厳重に包んだ絵を、書れ高き男に突きだした。

「宇宙最高傑作だ」

ヨハンは一瞬、受け取るような仕草を見せるも、さすと両手を広げた。

「その……それは作品の出来、ところじとですか。それとも……」

「無論、どちらでもある」

「それはまた大胆な……」

ヨハンは眉を段にした。驚きと不審の念を隠せずにいられないようだ。

それは無理もないことだつた。マルコの作品のほとんどは『無題』『花』『海』など、ありふれた一語きりのタイトルなのだ。

マルコはがまわざ続けた。

「この絵を、私の指定する場所、指定する時節に飾つてもらいたい」「私が、ですか？」

ヨハンは自分を指した。

「そうだ。君のような男でなければ、できない相談なのだ」

マルコはおもむろに壁棚のほうへ足を向け、月球儀の北半球にしわしわの指を置くと、一いやりと振り返つた。

「……」

ヨハンは痛みをこらえるような顔で黙つてしまつた。

「マルコ爺もついに頭にきたやがつた……かね？」

「い、いえ……」

男は月をそらした。

マルコはかまわざ続けた。

「飾る方法は任せる。が、包みは必ず月の上で解いてもらいたい。それまでは絶対に誰にも見せるなよ。ヨハン、君も含めて絶対にだ。それから、このことはマスコミを通じて大々的に報じるのだ」

ヨハンは三度目の宇宙飛行を一年後に控えたベテランパイロットだった。過去一回は宇宙ステーションでの仕事だったが、次回のミッションは『諸般の事情』で長いあいだ凍結となっていた、月面への再着陸だ。

「まあ、絵の一枚くらいはなんとかなるでしょうが……それにしても、あなたはいったい何を考えているんです?」

マルコは低く笑つた。

「なーに、まともな絵も描き飽きたが、まともな展示にも飽きた。それだけのことだよ」

緊急記者会見でヨハンは言った。

「再来年の月面ミッションには特別な余興があります」  
当代最高の画家による宇宙最高傑作を月面で初公開する、というヨハンの発言はマスコミを通じ、世界中に衝撃を与えた。特に人々を驚かせたのは、絵のタイトルにも増して大胆なツアー内容だ。マルコはなんと、すべての国の代表を自費で招待したのだった。

地球の裏側にいるニースキヤスターが衛星中継を通じてマルコに訊いた。

「このイベントが実現すれば、あなたは一文無しになってしまっわけですが、せつかく築き上げた財産をフイにして後悔はないのですか?」

「私にとつて金といつのは、画材とパンと日々の家賃、それ以上の意味は持たないよ」

「ほんとうにそれだけ?」

「それだけだ」

画面の若者は下を向く。

マルコは仕方なく笑顔を作った。

「ただ……もし『必ず満足のいく絵が描ける』という魔法のチケットが発行されたなら、話は違つてくるかもしけんがね」

人類初の月面着陸から半世紀以上たつた今、宇宙船や宇宙服の進歩により、優良な健康状態にある人なら誰でも宇宙へ行くことが可能だつた。問題は……費用だつた。以前よりは安上がりになつたものの、宇宙飛行はまだまだ国家予算の浪費家であり、また大金持ちの道楽であり、議員の収入ごときで手を出せる代物ではなかつた。それをタダで宇宙へ行かせてくれるというのだ。個人の財産で公人が旅することなど到底できないと、はじめは断る国が相次いだ。そんなあやしい雲行きを吹き飛ばしたのは、ある小さな国の首相のひと言だつた。

「私は芸術を愛する国民の代表として、また宇宙を愛する少年少女の代表として、月の大美術館へ招かれたのです」

そして、一年の月日が流れた。

荒れ果てた月の高台に集まつた人々は一百を超えた。調査を終えた宇宙飛行士たち、偉大な画家に招かれた諸国の首脳たち、力を駆使して勝手にやってきた民間の大物たち。

幾多のスポットライトが重なる先に、一つのイーゼルと、包まれた絵を抱える宇宙服の男が立つた。

いよいよ展覧会のはじまりだ。

ヨハンはイーゼルに載せた絵から、さつと覆いを引き払つた。

人々は息をのんだ。

宇宙の静寂があつた。

やがて、各々の耳もとのスピーカーに汚いノイズが吹き荒れた。

「我々……我々はこんなくだらないジョークを見せられるために、危険を冒してはるばるやってきたというのか？」

そこにあるのは三十号サイズの、ただのキャンバスだつた。まだ

なにも描かれていなし、安物の白いキャンバス。

月の荒野に群がる眼光という眼光は、巨匠の代理であるヨハンに

向けられた。

「どういうことなんだ、これは！」

東洋訛りの英語を皮切りに、誰彼となく息を吸いこんだときだつた。

ヨハンは口もとのマイクにささやいた。

「時間だ。ライトを消してくれ」

地平の彼方から差すほのかな陽の光が、人々の長い影をつくつた。

「これより月面展覧会を開催いたします。お集まりの皆様、どうか正面をご注目ください」

人々は映画の本編がはじまつたかのごとく静まった。

そこにあるのは、色のない世界だった。

漆黒の宇宙、灰色の起伏、白いキャンバス。

なにもかも変わり果ててしまった先にある、終末の景色のようだつた。

人々は互いを見合つた。これをどう受け取つたらいいのか。

賢者たちは口をつぐみ、愚者たちは口を開いた。

「なるほど『ありのまま』を愛する彼らしい作品といえなくもないが……」「フン、くだらん皮肉だ」「正直がつかりというほか……」「シッ！」

ヨハンは人差し指を立てた。

白いキャンバス越しに、ふつと青白い炎がともつた。

画材になにか仕掛けでもあるのかと、人々はどよめいた。

「お集まりの皆様、この作品のタイトルを今一度、思い出してください

さい」

人々は時を忘れ、場所を忘れ、そしてなにもかも忘れた。

人々は顔を上げてゆく。ただ顔を上げてゆく。

あるいは天からの授かりものを受け取るように、着ぶくれた両手を掲げた。

小さな球を写したヘルメットの奥には、光るものがあった。

\* \* \*

時は流れた。

ここは南の海に浮かぶ小さな島。ヤシの木に囲まれた海沿いの小学校では、今日もいつも通りの授業がおこなわれていた。

開け放しの平屋の窓から、若い女の声がする。

「はい、静かに。こうして人々は心を入れ替え、私たちの島は海の底にならずにすんだのでした」

安堵のため息、かすれたあぐび、クスクス笑いがぽつぽつとあつた。

そこに男の子の尖った声が響く。

「先生。それってさ、ほんとうほほくらをいましめるための、つくられた神話なんでしょう？」

子供たちのざわめき。

「なーんだ、ただのお話か」「ちがうよ」「そりや」「ほんとうにあつたんだから」「うらやましい」と、子供たちのざわめきが止まらなくなってしまった。

「はいはい！」女教師は手を叩く。「では、明日は教室での授業はやめにして、特別に社会見学会をおこなうことになります。行つたことがある人は、そのことを自慢したりせず、今こうして和平に暮らすことができる奇跡に感謝しましょう」

どこ行くんだろ、とひそひそ声が飛び交う。

カツカツカツ、と教師は板書する。

「明日の朝九時、『宇宙エレベーター発着所行き』の桟橋に集合。寝坊した人は置いていきます。いいですね？」

「はーい！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7596f/>

---

月面展覧会

2010年10月8日15時54分発行